

高校部活動における留学生競技者導入の是非
～An argument on the right and wrong of foreign student
athletes participating in high school varsity competitions～

1 K 0 7 B 2 1 0 - 0

指導教員 主査 友添秀則 先生

氏名 森雄貴

副査 倉石平 先生

【本論文の動機・目的】

私は小学校の時から現在までバスケットボールを続けてきた。その中で特に私のバスケットボールの考え方が変わった出来事が、高校生の時の全国大会の試合であったセネガル人留学生の存在である。私自身、身長が高くないが、それまでは身長に関してそれほどまでに意識したことはなかった。しかし、高い身体能力を持った外国人留学生の存在を知った時、度肝を抜かれた。圧倒的な身長と身体能力でゲームを支配していたのである。

それから、どのようにして留学生が我が国の高校スポーツに進出してきたのか、またそれは今後も増えていくのかということが気になるようになった。

以上の理由から、高校部活動に留学生競技者が導入されるようになり、部活動に対する周囲の考え方がどのように変化したのかを考察する。

また、部活動自体の本来の意義やあり方とは何か。さらに、留学生に関する規定が妥当であるのか。本論文は以上のことを研究する機会とする。

【本論文の方法】

本論文は、関連文献の講読による文献研究によって行う。また、雑誌や新聞記事等の人々の意見も参考に、研究を進めていく。

【第一章】

我が国の部活動は、政治など様々な影響を受けて学校教育の中で少しずつ変化し、現在の部活動として取り込まれるようになった。戦前は軍国主義の考えがあり、軍事力強化のために学校体育やスポーツが行われていた。そして戦後は、戦前の考え方が一掃され、レクリエーションとしてのスポーツや体育へと変わった。それが次第に競技スポーツへと変わっていき、競争主義の考えが根強いてきた。

現在のような競争主義の考え方が強くなってきた原因は様々であるが、各スポーツ団体の支配力や東京オリンピックによるスポーツの関心の高まりによる影響が原因であると考えられる。次章では、実際に留学生競技者がいつごろから我が国の高校スポーツで活躍するようになったのか、考察していく。

【第二章】

高校生の留学生競技者の現状を考察するため、バスケットボール競技と駅伝において、全国高等学校総合体育大会（以下インターハ

イ）に出場したチームの留学生の人数、及び在籍するチームの成績を調べた。その結果、バスケットボール競技では平成 15 年、駅伝競技では平成 11 年頃から留学生の存在が色濃くなってきたと考えられる。また、個人記録を参考にしても、留学生の存在の大きさがうかがえる。

次章では、そういった圧倒的な身体能力を持つ留学生導入の容認的な意見について考察していく。

【第三章】

本章では、留学生競技者導入の肯定的考察について述べる。雑誌や新聞の記事に掲載されている部活動の監督や選手、またはファンの人の意見を参考にする。その結果、留学生とはいえ、日本の高校で生活をしている同じ人間であり、スポーツを行う権利は誰にでもあるという意見や、留学生競技者の存在は我が国の競技力の向上に貢献しているという検討から、留学生の出場規制などは本当に良い方策であるのかという疑問点が浮上した。次章では、本章とは反対に留学生導入の批判的意見を述べていく。

【第四章】

本章では、留学生導入の批判的な意見を述べていく。また、前章と同様に、新聞や雑誌の記事に掲載されている部活動の監督や選手、またはファンの人の意見を参考に述べていく。その結果、留学生競技者の導入によって、本当に我が国の選手は競技力が向上しているのか。また、学校教育の視点で部活動を考えると、競争主義の考えが浸透した現在の部活動は、教育的ではないのではないかという問題が浮上した。

【結章】

本章では、第一章から第三章で述べた考えから、高校部活動の問題点と今後の在り方についての問題を提起し、本論文全体をまとめる。その結果、留学生競技者の導入は高校部活動において良い影響を与えているとは考えられないという見解となった。よって、現在の高校体育連盟の留学生に関する規定が妥当であるのか今後、検討していく必要があるのではないか。